

## 第13回 宗門教学会議 開催報告（後半）

# 平和のために何をすべきか／何ができるか

## —戦後80年を迎えるにあたって—

第十三回宗門教学会議は、二〇二四（令和六）年七月三十一日、「平和のために何をすべきか／何ができるか—戦後80年を迎えるにあたって—」をテーマに開催されました。

日本は、二〇二五年に戦後八十年を迎えます。宗門では、戦後七十年を機縁として「平和に関する論点整理」を作成し、その後も「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）における取り組み、映画「ドキュメンタリー沖縄戦—知られざる悲しみの記憶—」の作成、戦争における被災寺院の調査・報告など、非戦平和への取り組みを継続していますが、現在、世界ではロシアによるウクライナ侵攻や、ハマスによるイスラエルへの攻撃とイスラエル軍のガザへの侵攻といった「戦争」と「平和」をめぐる緊迫した状況があります。こうした中で、私たちはどのように戦後八十年を迎え、何をすべきかを考え、宗門として、過去の学びを踏まえつつ、未来に向けた具体的な行動を行っていくための視点や取り組みを明らかにしていくための議論を行いました。

第十三回宗門教学会議では、委員として大谷栄一氏（佛教大学教授）、赤松徹眞氏（本願寺史料研究所所長）、宮地清彦氏（曹洞宗総合研究センター主任研究員）をお招きしてそれぞれご発題いただきました。また、座長は大田利生総合研究所長、対論者は寺本知正総合研究所副所長が務め、有識者発題に続いて全体討議を行いました。

前号では、大谷氏、赤松氏、宮地氏からの提言を報告いたしました。今号では、全体討議について報告いたします。

\*宗門教学会議は、現代社会の諸課題に対して専門的見地を有する有識者を招聘し、多角的・学際的な議論を行う会議です。その際になされる有識者の意見・提言は、宗派の見解を代表するものではなく、宗教者が持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、「自他共に心豊かに生きる」ことのできる社会の実現」のためにいかなる役割を果たしうるのかを探るための参考としています。

## 一、戦時中の教学的課題について

○寺本 有識者の先生方、ご提言、誠にありがとうございました。まず、仏教の理念についてのお話がありました。本願寺派では「真俗二諦の教旨」が戦争協力背景にあったのではないかと問題視されてきました。教学上の問題について、戦後、それぞれの教団でどのように理解されているのかをご教示いただきたく思います。

○大谷 真宗には「真俗二諦」や「王法為本」の議論があります。日蓮宗では、日蓮の書に『立正安国論』がありますが、その「立正安国」というキーワードが戦時中に多用され、教えよりも国を優先するという捉え方がなされました。禅宗では、栄西の『興禅護国論』の「興禅護国」などが同じように解釈されました。戦前には、国家と宗教を言い表す各宗派の言葉が、国家主義的な解釈をされ広められました。

もう一つ付け加えると、一九三五（昭和十）年に天皇機関説事件があり、以降、日本精神が強調される中で、天皇と仏教の信仰を結び合わせる「皇道仏教」という流れが出てきました。日蓮宗では「天皇本尊論」という議論があります。日蓮宗の本尊は『法華経』で説かれる久遠実成の釈尊ですが、当時は久遠実成の釈尊よりも天皇が上であると理解されました。浄土宗では、阿弥陀仏と天皇の関係をどう考えるのかといった議論がありました。さまざまな宗派で、天皇と信仰の一致を強調する教えや国家に従属するような形で教えが解釈をされました。

日蓮宗の場合は、一九五四（昭和二十九）年に立正平和運動という活動を展開します。また、戦前に「立正安国」が国家主義的に唱えられた反省から、戦後になって『立正安国論』の「安国」というのは国土の安穩を意味するとの再解釈がなされました。したがって、戦前の反省を踏まえて戦後の平和活動があるという捉え方になるかと思えます。

○宮地 曹洞宗では、『修証義』を編纂した大内青巒のもとで研鑽を積んだ人たちが、大正期に『修証義』の解説書を一齐に出版しました。これらはほぼ皇道仏教へ舵を切ろうとしている本と言っていると思います。昭和期に入り、全くそれが下火になることなく、むしろ燃えさかるような形で戦争へと入っていききました。

戦後、道元禅師・瑩山禅師の教えが戦争協力を結びつけられたという反省を踏まえ、その一環として提言で紹介した「梅花流詠讃歌」という形となっていく訳です。とはいえ、見るべき資料があるにもかかわらず、戦前や戦中の教学に関する研究がなかなか進んでいないというのが実情です。

○赤松 真宗の場合は、「真俗二諦の教旨」ということを明治以降に明確にしてきた経緯があります。私たちは、敗戦以前の皇国・国体を絶対視する理念と、敗戦後の政治での民主主義の理念との決定的な違いを認識する必要があります。敗



戦前は皇国・国体は神聖なこと、無謬であつて、臣民として忠君愛国に尽くすことが、基本的な体制でありました。信心を得て浄土に生まれることが「真諦」として示され、皇国・国体に奉公することが「俗諦」としての教団及び人びとの在り方であると示されていきました。信を得た念仏者が浄土往生することと、皇国・国体に奉公することを「分けて」教学理解することが、「真俗二諦の教旨」の

基本的な枠組みであつたと思います。

ところが、「真俗二諦の教旨」という教学理解は戦後も継承、踏襲され、その教学的課題を本格的に議論・検証する対象にならなかつたといえましょう。したがつて、戦時下の「真俗二諦の教旨」が戦争協力・加担にどのようなはたらきをしたのかを検証することが教学に関わる当事者からもなされなかつたようです。その一つの事例として、一九八四（昭和

五十九）年に、戦前から連続する「真俗二諦の教旨」の踏襲を示した安居判決が出されています。戦後三十九年を経ても「真俗二諦の教旨」を問い、どのように考えるのかというアプローチをしないままに経緯してきたということです。しかし、教団の中では「真俗二諦の教旨」を戦時下の現実から問い、その問題の所在を明らかにする人びともいました。

「真俗二諦の教旨」が広く議論・検証

## 大谷栄一氏

### 【略歴】

佛教大学社会学部教授。博士（社会学）。専門は、宗教社会学、近代仏教。東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了。（公財）国際宗教研究所研究員、南山宗教文化研究所研究員、佛教大学社会学部准教授を経て、現在に至る。著作に、『増補改訂 近代仏教スタディーズ―仏教からみたもうひとつの近代―』（共編、法藏館、二〇二三年）、『戦後日本の宗教者平和運動』（編著、ナカニシヤ出版、二〇二二年）、『日蓮主義とはなんだったのか―近代日本の思想水脈―』（講談社、二〇一九年）、『近代仏教という視座―戦争・アジア・社会主義―』（ぺりかん社、二〇二二年）、『近代日本の日蓮主義運動』（法藏館、二〇〇一年）など。日本宗教学会賞（二〇〇一年）、中村元賞（二〇〇二年）、望月学術賞（二〇二〇年）を受賞。

の対象とされるようになったのは、一九〇年頃からでした。備後教区、安芸教区、部落解放同盟広島県連合会の同朋三者懇話会において差別問題について議論される中で、三つの課題が教学上の問題として指摘されました。信心の社会性、業・宿業、そして真俗二諦です。信を得て浄土に往生する念仏者のあり方を説きながら、部落差別をはじめとする差別の現実を問い、学ぶことなく、差別を容認してきたこと、あるいは、戦争に関わる人びとの往生浄土を説きながら、国家が主導する戦争の現実、人びとの尊厳が軽視され・蹂躪される戦争の現実を問い、学ぶことなく、容認してきたこと、そこに「真諦」と「俗諦」を「分ける」という「真俗二諦の教旨」があります。私たちは、真宗のみ教えに学びながら、念仏者として現実を問い、平和に向かってどのような発言をし、行動していくのか、「真俗二諦の教旨」の検証・再考が、非戦平和へのアプローチの一つとなると思います。

## 二、沖縄からアジアの中で 平和を考える

○寺本 次に、沖縄での取り組みについてうかがいたいと思います。伝統仏教教団の平和活動の中で、沖縄で何か特別な活動をしたということは、戦後あるのでしょうか。

○大谷 例えば、発題でも取りあげた真言宗智山派などは、海外戦跡慰霊巡拝の一環として沖縄に行っています。浄土宗や日蓮宗など、沖縄で戦没者慰霊の法要を行っている教団もあります。

私の方からも本願寺派の皆さまにお聞きしたいことがあります。総合研究所が出された「平和に関する論点整理」(二〇一五(平成二十七年)年)の中で、「日米安全保障条約と念仏者の立場」に関する記述があります。先ほどの赤松先生の話を踏まえると、戦前と戦後の政治体制には大きな違いがいくつもあると思います。戦後に関してはアメリカとの関係が

非常に大きな問題としてあるのではないかと思います。その象徴が日米安全保障条約であり、アメリカの核に守られて日本人の人びとが生活しているという矛盾の多くを負わされているのが沖縄ではないでしょうか。本願寺派が沖縄のドキュメンタリー映画を製作していることから、沖縄のことを重視しているということはわかりますが、沖縄の基地の存在を含めた日米安全保障条約の現実的な問題に関しては、どのように向き合おうとされているのでしょうか。

○寺本 総合研究所としては、二〇一九(令和元)年に映画「ドキュメンタリー 沖縄戦―知られざる悲しみの記憶―」を製作しました。それ以前より沖縄での調査を重ね、実際に沖縄慰霊の日に現地に赴き、現地の方々と行動を共にするとうような、現地の方に寄り添う活動を継続して行っているという現状です。

○赤松 現在、政府は日本とアメリカ、あるいは韓国などとの軍事的な同盟関係を結び、さらにオーストラリアなどの



軍事的な関係の強化の動きが見られる現実があります。私たちは、国際関係及び軍事に関わる現実に関心を持ちながら注視を続けることが大切だと思います。私たちの教団は、宗教法人として、その立教の理念に基づいて、伝道をはじめとする宗教活動とともに、社会に関わる活動をしています。教団における人と人との関係の基本は、国という枠組みを超えた人びととの交流・対話を広く、深く積み

重ねながら、宗制によれば、「自他共に心豊かに生きることでできる社会」を実現するように、持続的に取り組むことが中心になります。

アジアとのつながりということでは、アジアンならば、例えば、アジアの仏教界の僧侶・人びとが本願寺という場所集い、交流・対話ができる環境をつくることも、平和への取り組みの一つになると思います。アジアの国々も政治的には諸

事情があるにしても、国を超えた人びととの交流・対話を実現していくことが平和へのメッセージ、実践になると思います。

○寺本 ありがとうございます。国という枠組みを超えて対話・交流をしていくということでしたが、そのとき、超えていくべき「国」が問われてきます。私たちにとって、教団にとって「国家とはいったいどう理解していくべきなのか」

## 赤松徹眞氏

### 【略歴】

一九四九年生まれ。龍谷大学名誉教授、本願寺史料研究所長。専門は、日本仏教史、真宗史、近代史。龍谷大学卒業後、龍谷大学文学部講師、助教授、教授を経て、現在に至る。著作に、『近代真宗者の「神社問題」論説集成』全九巻（三人社、二〇一九年）、『日本仏教史における神仏習合の周辺』（永田文昌堂、二〇一三年）、『資料清沢満之』全三巻（共編、同朋舎出版、一九九一年）、『新佛教』論説集』全四巻（共編、永田文昌堂、一九七八―一九八二年）など。論文に、「浅野研眞の思想と社会的実践―仏教理解とその実践としての仏教社会学及び仏教社会事業―」（『仏教史研究』六〇、二〇二二年）、「大谷光瑞の『満州国』論から『大東亜共栄圏』論―大谷の仏教・真宗論の立場との関係―」（『仏教史研究』五八、二〇二〇年）など多数。



ということ、大きな課題として取り組んでいかなければなりません。

### 三、平和を学ぶ場、発信する場の創造

○寺本 対話や交流と少し関わることで、**「戦後問題」検討委員会答申**（一九九六（平成八）年）の「教団の今日的課題について」の中に、「平和センター（仮称）」の開設があります。現在の宗門の状況を踏まえて、「平和センター（仮称）」はどのような形であるべきなのか、先生のお考えをお聞かせください。

○赤松 教団として非戦平和について発信する環境、平和センターという名称を持つ組織・窓口を設置することは、広く社会に開かれた教団として大きな意味があると思います。補足して言えば、総合研究所に開設されれば、この間、総合研究所での平和に関する研究及び成果が生かされるとともに、平和に関する研修についても研究員が担当して開催すること

ができると思います。総合研究所には、「平和に関する論点整理」や沖繩戦の映画制作をしてきたという実績・経緯もあります。

○寺本 ありがとうございます。これまでさまざまな平和への活動がなされてきていますが、「平和センター（仮称）」の開設というご提案を頂戴いたしました。これまでの活動の継承、あるいは資料等々のアーカイブといったようなことは、少なくともやっていきたいと考えております。

### 四、若い世代への平和教育

○寺本 宮地先生への質問です。青少年、若い人たちが、他宗派の寺院や僧侶と現実レベルで連携できる可能性について、いかがでしょうか。

○宮地 曹洞宗総合研究センター教化研修部門の中に、青少年教化課程というのがあります。これは青少年を対象にした教化活動のプロパーを育成する場所で、

曹洞宗では、出家在家にかかわらず、若い人に伝えていくことに注力してきました。毎月、全寺院に『曹洞宗報』を配布していますが、その中に小さなお子さんから中学生、高校生くらいまでの方々に向けて、仏教の教え、禅の教えをわかりやすい形で伝えるテキストを同封して送っています。わかりやすい絵を用いた教材、小さなお子さんには『般若心経』の文字を鉛筆でなぞり、字を書きながら『般若心経』の文章を覚えてもらう、あるいは道元禪師のお名前を覚えてもらうなど、そのような形から入っていく、だんだんレベルアップさせていくという方法をとっています。

また、梅花流詠讃歌に関しても、歌を聴いて、心に響くものがあれば、若い方にもどんどん来てくださいという形で呼びかけています。宗門の関係学校・関連学校に行き、宗歌を学生さんに歌って、聞いてもらう、あるいは意味を教えるという形での取り組みも行っていきます。

曹洞宗とえば、「坐禪」「厳しい修行」



### 宮地清彦氏

#### 【略歴】

曹洞宗総合研究センター近現代教団研究部門主任研究員。修士（文学）。専門は、中国仏教学（天台教学・華嚴教学・中国禅宗教学）。駒澤大学大学院人文科学研究科博士後期課程 満期退学。曹洞宗総合研究センター現代教学研究部門専任研究員を経て、現在に至る。著作に、『瑩山禪師伝』（曹洞宗宗務庁、二〇一一年）、『瑩山禪師 言の葉集』（編著、大本山總持寺、二〇一六年）など。論文に、『修証義』と『明教新誌』『扶宗会雑誌』（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』二四号、二〇二三年）、「仏教典籍における「自然」「国土」の位置付けについて」（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』二二二号、二〇二〇年）、「瑩山禪師と日本中世社会の関連について」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』一二二号、二〇〇七年）、「瑩山禪師の善悪観——『宏智録』との関連性より考える——」（『宗学研究』四四号、二〇〇二年）、「近代における「先祖崇拜」についての思想的考察——『宗報』を基礎資料として——」（『宗学研究紀要』一四号、二〇〇一年）、ほか多数。

とイメージされることが多いですが、それだけでは曹洞宗の精神とは結局何かとということがわかりませんので、小さな子どものうちから少しずつ段階を追って教えていくというに取り組んでいます。そこに出家在家を問わず、連携していく糸口、可能性のようなものがあるのではないのでしょうか。

○寺本 ありがとうございます。本願寺

派にも、若い方やこれから僧侶になる方へのカリキュラムなどがあります。それらの現状、特に平和教育について、赤松先生、いかがでしょうか。

○赤松 安芸教区や長崎教区など原爆の投下された地域の人たちの証言、あるいは全国各地での爆弾投下による身近な戦災、被災などの現実を教材にした平和へのアプローチは学校教育や地域・自治体

でもされてきました。しかし、真宗のみ教えやお釈迦様の教えを学びながら非戦平和に取り組むことはできていませんので、教区・組・寺院などでの取り組みが重要となります。

教団でも、キッズサンガなどを開くなど集う機会がありますが、「平和」に関するテーマが取りあげられることは少ないのではないかと思います。そうした場

で「平和」へのアプローチを戦争の過酷な現実に学びながら、平和の尊さを伝えていく、考える環境を作る必要があると思います。また、これまでに、戦後五十年・七十年に、そして「宗門寺院と戦争・平和問題」調査などで収集した写真や展示パネルなどを活用していくことが大切だと思います。

今日まで、非戦平和に取り組んできた経過・成果を改めて公開することも考えていただけたいと思います。

先ほど沖縄の話がありました。沖縄を非戦平和の研修の場所にして、沖縄の実情を学び、人びとの話を聞くことは大切ですが、たとえば、基地の騒音についても、私たちが体感、感じなければ課題がみえてこないと思います。

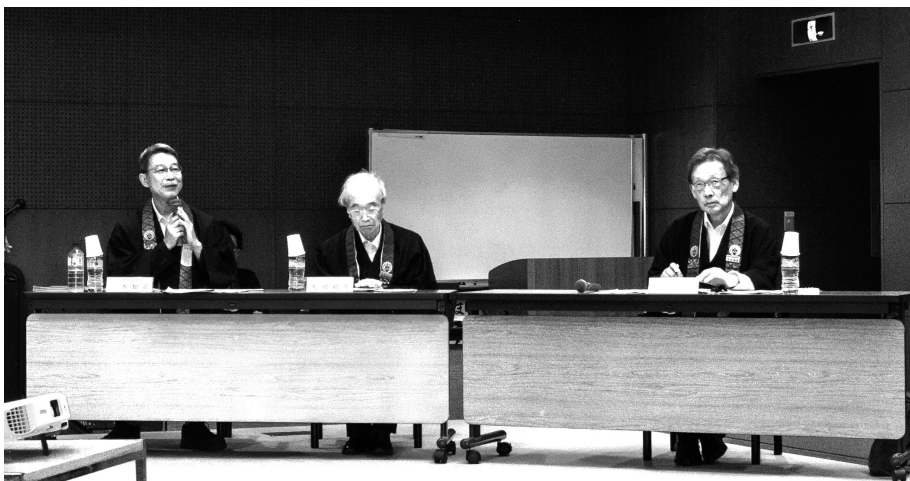
## 五、教団と宗教者平和運動の関わり

○寺本 大谷先生のご発題の中で、本山などの中央と地域との一種のズレといえますか、意識・活動がうまくかみ合わな

いことがしばしばあるというお話がございました。この点について、そこを埋めていくようなアイデアや、何かヒントになるようなものはありますでしょうか。

○大谷 教化について一言申しあげると、近代以降の仏教教団にとって、教化は非常に重要な活動でした。戦前では、青少年や女性への教化活動は盛んに行われていますが、平和の教化に関する活動はそれほど多くはないのではないかと思います。戦後もそうです。先ほど、「平和の教学」という話をしましたが、それは別に、「平和の教化学」といったものも行われてもいいのではないかとということを以前から思っていました。

例えば、学校教育の中では、ワークショップのような形、つまり体験型学習を通じて平和のことを考える教育が実際行われているそうです。ですので、平和スタディーツアーや、平和教育のワークショップ、平和に関するアーカイブ化した資料を何らかの形で見せる機会を設けるなど、さまざまな可能性があるのでは





ないかと思えます。

ご質問いただいた中央と地方とのギャップについては、全く合致することはないと思えます。ただ、本願寺派の場合、教区や組の中で独自の平和に関する取り組みが大々的になされており、これは他の宗派ではそれほど見られない活動だと思えます。戦後五十年の際に各教区で行われた活動、たとえば岐阜教区や東京教区で出された資料がありますが、戦時中の教区の活動が非常に詳しくまとまっており、貴重な資料だと思います。中央と地方を媒介する組織があれば望ましいと思えますが、トップダウンだけではなくボトムアップという形で、中央と地方が影響し合う形で、平和に関する取り組みを行っていくのが望ましいのではないかと思えます。

○寺本 ありがとうございます。戦後五十年の「戦後問題」検討委員会答申」では、人間像の検証ということが課題としてあげられました。戦前には、理想とされる人間像、「お国のために」尽くす

人間像というものが、少年会や婦人会などあらゆるレベルで説かれてきました。そうした人間像、理想像といったものは、今もある面では継承され、一方で新たなあるべき人間像というものが流布するといった、さまざまな問題があります。そうした検証も、一つの課題として取り組んでいかなければなりません。

## 六、平和に関するさまざまな

### 取り組みの可能性

○赤松 先ほど伝統仏教教団による戦争責任についてのお話がありました。一方で戦争責任の認識や声明を出されていない教団もあると思えます。そういった教団は、どのような取り組みを行ってきたのでしょうか。

○大谷 宗教者の平和の取り組みは、各宗派でさまざまな形で行われています。ただ、研究が追いついておらず、研究成果として上がってきていないところもあります。戦争責任に関する表明を出して

いない教団もありますが、だからといって、平和に対する取り組みをしていないわけではないと思います。

戦後の『中外日報』や『仏教タイムズ』の記事を見ると、戦争責任についての声明を出していない教団でも、戦没者供養の法要を開くなど、平和に関する取り組み自体はされています。ただ、戦争に関する認識を声明としてまとめるには、宗派内のさまざまな状況や理由があるのだと思えます。

○赤松 本願寺派の中でも、ミャンマーやカンボジア、タイなどの人びとへの支援に取り組んでおられる方々がおられます。そういう方々とも意見交換や情報共有をして、より一層多くの皆さんに現状を知っていただく機会を設けることも大切だと思います。

○大谷 アジアの宗教者が交流する機会や場所を設けてはどうかというご提案には大賛成です。海外で活動しているNGO団体やNPO団体などに、信仰を持っている人や僧侶がいる場合、さまざまな

宗派の方が活動している場合がそれぞれにあります。とくに後者では宗派を超えた活動が行われていると言えます。NGO団体やNPO団体においては、そういった他宗派間のコラボレーションが実現をしている場合があります。

しかし、そういった団体自体が一堂に会する機会や場所はありません。ですから、先ほどの「平和センター（仮称）」は、本願寺派の中の資料をアーカイブ化するという意味においても大事だと思えますが、できれば幅広く他宗派の方々とのコラボレーションもできるような場としても活用できるような場であれば、非常にありがたいなと思っています。

本願寺派も含めて、平和に関する他宗派の声明文などを調べるのが難しく、過去の宗教専門紙などを見ないとなかなか見つけることができません。ですから宗教者の平和の取り組みに関する資料のアーカイブ化というのは必須事項だと思います。年がたてばたつほどこういった資料はなくなってしまうので、その教団

全体、もつと言えば宗教界全体で平和への取り組みに関する資料をアーカイブ化してそれを見ることがある場があればいいのではないかとこのことを私も考えていました。

○宮地 曹洞宗でも、資料のアーカイブというところに興味があります。近現代研究部門では戦前の資料を中心に進めています。戦前もまだ整理できていない状況です。長いタイムスパンでやっていると、なかなか「平和」を語るためのバックボーンである資料がないということになってしまいますので、大きな課題であると実感しました。

○赤松 今、大谷先生と宮地先生から、資料関係のアーカイブ化という点についてご指摘いただきましたが、本願寺派では『本願寺新報』を毎月三回発行しています。また『宗報』という機関誌も発行しています。戦後のものについては、本願寺史料研究所で増補改訂版『本願寺史』第四巻目の執筆にあたって、『本願寺新報』や『宗報』、『宗務所広報』等のデジ

タル化が既に済んでおります。したがって、関係資料を教団内での活用を進めるとともに、それを教団以外の方にも公開できるように環境整備についても検討していただければと思います。

○寺本 ありがとうございます。総合研究所でも資料のアーカイブ化は喫緊の課題だと認識しており、デジタル化・アーカイブ化することで次世代への継承が果たされるのではないかと念願しています。

お時間が参りました。先生方、本日は誠にありがとうございます。平和に向けて具体的に何を進めていくのかということに関しても、多くのヒントを賜りました。

大変貴重な時間をいただきましたこと、改めて御礼申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

総合研究所 現代教学・課題研究室

## 座長挨拶

浄土真宗本願寺派総合研究所 所長

大田利生

改めまして、大谷先生、宮地先生、赤松先生、大変貴重なご提言をいただきまして、ありがたく御礼申しあげます。

大谷先生には、ご発題の中で、戦時教学の問題は反省的になされてきたが、「平和学」あるいは「平和の教化学」という視点が見られないということ、そして平和教学の追求は、文化的平和の役割を果たし、平和の文化に寄与する可能性が大いにあるということ

をお教えいただきました。大変印象的なご提言をいただき、ありがとございました。

宮地先生には、梅花流詠讃歌という仏教讃歌を通じた曹洞宗における非戦平和への取り組みをご紹介いただきながら、青少年教化を含めた、教団でなすべき今後の課題等についていろいろお話しいただきました。我々真宗教団にとっても大変に参考にさせていただきますことが多くございました。

赤松先生には、宗門の非戦平和への歩みを掲げていただきながら、現実を直視して、取り組みを持続していくべきことを強く提言していただきました。ありがとうございました。

宗門教学会議は、教団が直面している社会的課題について有識者の先生方からご提言をいただき、それを我々宗務員が、それぞれの部署において反映していくという建て付けで行われています。先生方には今後とも、本願寺教団に対しましてご協力、またご支援等をお願いいたします。

長時間にわたりまして本当にありがとうございました。皆様方にも御礼の言葉を申し上げます。ありがとうございました。